

「アフリカの真珠」ウガンダより

2024年(令和6年)6月

6月に入り、ウガンダの雨期も終わったようです。時々雨は降りますが、晴れた日が多くなりました。乾期ですが気温は30度を超えることはなく、日陰は風があれば涼しい感じがします。英国のウィンストン・チャーチルは1907年当時の植民地省政務次官としてウガンダを訪問した際にその気候の温暖さ、緑豊かな自然環境をみてウガンダを「アフリカの真珠」と呼んだそうです。今でもウガンダ政府は観光振興の際などにこの名称を使っています。私もウガンダの今を伝えるべく、この表題としました。

1、世界難民の日@ウガンダ

ウガンダには現在、160万を超える難民が暮らしており、世界有数の難民受け入れ国となっています。

6月20日の「世界難民の日」に合わせて私は難民受け入れ地の1つであるウェスト・ナイルのライノー・セトルメントで行われた行事に出席しました。

私の世代で難民と言えば、緒方貞子国連難民高等弁務官を思い出します。1991年の就任早々、緒方氏はルワンダ難民の問題に対応します。この地域はまさに彼女が国連機関の長として最初に指揮を取った場所でした。

難民キャンプと言えば、皆さんは何が思い浮かびますか？フェンスに囲まれた臨時の住居に寝泊まりし、日々の食糧や水にも苦勞する状況。そのような場面を私も想像しながらライノー・セトルメントを訪問しました。ところがウガンダの難民居住区にはフェンスはありません。避難してきた難民はウガンダ国内で土地、建物の使用が認められ地元民と一体になって暮らしているのです。難民受け入れ地帯がセトルメントと呼ばれます。難民は自己責任でウガンダ国内での移動も認められています。ウガンダにはこのような地域がいくつかあり、式典が行われたライノー・セトルメントはそのうちの1つです。地元政府、国際機関やNGOの支援のもと、難民と地元民はいわば一体となって生活を維持しているのです。

難民に対するこのような寛容な態度、政策は国際的にも稀であり難民政策のモデルケースとも言われています。

ウガンダは以前、内戦に苦しみ国民は周辺国に難民として避難せざるを得なかった時期があります。式典に出席した地元政治家の1人はウガンダは今、避難民を受け入れて恩返しをしているのだと述べていました。

ウガンダのようにいわば難民受け入れに成功している地域は、逆に国際社会の関心を引きにくくなっていると言う現実があります。百六十万以上の難民支援を1日も欠かさず続けていく事は、容易なことではありません。国際社会は、ウガンダ国民の寛容さに頼っている面があります。国際社会の責任ある支援国として、今後どのような支援を行っていくのか、難民問題の根本的な解決にはどのような政策が良いのか、真剣に考えさせられました。

〔セツルメント遠景〕



〔若者によるファッションショー〕



2、国連人口基金(UNFPA)/セーブ・ザ・チルドレンへの支援

世界難民の日にウェスト・ナイルへ出張したのに合わせ、UNFPA とNGOのセーブ・ザ・チルドレンのプロジェクトの立ち上げや開所式に出席しました。

UNFPAは、ライノーセツルメントで性と生殖に関する健康と権利を擁護し、また、ジェンダーに基づく暴力に対処するサービスへのアクセスを確保する事業を日本からの拠出金に基づいて始めました。セツルメントを巡回し、健康相談や家族計画の相談、指導、妊婦に対する診断やケアなどが具体的な支援です。先に述べたとおり、地元民と避難民から希望者を受け入れています。避難民と地元民の比率は、場所にもよりますが、4対1ないし、5対1程度の割合だそうです。地元の人でもクリニックを利用していました。

クリニックの1つで行われたイベントでは、日本の支援に対する感謝が述べられるとともに、難民の若者たちによる歌なども披露されました。

セーブ・ザ・チルドレンはアルア県において、子供の保護強化支援事業を行っています。地元自治体、警察、また社会福祉の関係者の方々と協力して、子供の保護事業への対応や巡回活動などを実施しています。今回は家庭で問題が生じ、青少年を一時的に保護する施設の開所や巡回に必要なオートバイの寄贈が行われました。

ジェンダーに起因する暴力や子どもの保護強化はアフリカ諸国に限った問題ではありません。日本を含めた先進国でも同様な社会問題に直面しています。日本は支援を行う立場ですが、同じような問題に直面する他の国の状況から学ぶこともできるのではないかと感じました。

[UNFPA のイベント]



[セーブ・ザ・チルドレンの保護施設開所]



3、アフリカで花開く日本のスタートアップ(その1)

日本国内でも数多くのスタートアップが成長しつつあります。ウガンダでも活発に活動しているスタートアップがあります。

RICCI EVERYDAY はカンパラで地元女性を雇用し(その多くがシングルマザー)、アフリカプリントの華やかな生地を用いてファッションアイテムを製作、日本で販売しています。同社を率いる仲本千津さんとカンパラでお目にかかることができました。今や大手の百貨店などでポップアップのイベントが行われています。仲本さんはご自身の体験を綴った本も出版されています。

日本でもアフリカプリントは人気を集めています。ビジネスが社会課題、支援にもなる同社のような取組みがますます盛り上がることを期待したいと思います。

今後、ウガンダで活躍するスタートアップ、日本企業の取組みを紹介していきたいと思っています。

[仲本さんと]



(以上)